

2 森町森川A遺跡から出土した円筒下層式土器について

— 北海道開拓記念館収蔵の熊野喜蔵氏収集資料 —

はじめに

ここで紹介する資料は、昭和36年、故熊野喜蔵氏によって発見・収集された森町森川A遺跡のもので、現在北海道開拓記念館に収蔵されている熊野喜蔵氏収集資料（熊野コレクション）の一部をなすものである。

今年度のシラリカ2遺跡の調査において、包含層および住居跡に伴って前期後葉の円筒下層式土器が多数出土した。これらのなかには円筒下層C式相当のものとみなされるものがあり、その中に森川A遺跡出土資料に類似するものがある。同遺跡の資料は出土地点が明確な一括資料で、昭和49年に熊野喜蔵氏と八木光則氏によりその一部が報告されている（熊野・八木1974）。しかし、誌上に発表されたものが限られていることから、北海道開拓記念館の複製許可を得てここに未発表資料を紹介するものである。なお、これらの土器の実測、観察は10数年前、大沼忠春氏（現北海道教育庁文化課）と遠藤が行ったものである。当時調査していた木古内町新道4遺跡のフ拉斯コ状ピットから出土した土器との比較検討のためその観察をしていたもので、これまで手許に実測図、拓影図、土器の観察メモを残してあったので、これを機会に紹介することで今後の調査、研究の一助になれば幸いである。

北海道開拓記念館に収蔵されている同遺跡出土の資料は土器、石器等あわせて86点である。これらは昭和48年（1973年）に記念館に寄贈、譲渡されたものである。『熊野喜蔵氏資料目録・II』（北海道開拓記念館1980）によると、森川A遺跡の収蔵番号は42,047。資料にはそれぞれ枝番号がつけられている。このうち枝番号1～28のものが土器の完形品（復元、大型破片を含む）である。これらには整理番号No1240～No1274が付されている。また、枝番号29～78までは目録に記載がなく整理番号は付されていない。この番号のものが土器片で、目録から判断すると以上の78点が土器である。

今回紹介する資料は整理番号のある17点と枝番号のみの付された33点、合わせて50点である。先の報告（熊野・八木1974）と重複する資料は9点あり、これらもあわせて掲載し、相当する図番号を記述の末尾に載せた。

以下文様構成、器形のわかる資料（1～17）については個々に記載し、破片資料（18～50）については部位ごとにその特徴をまとめて記載することとする。

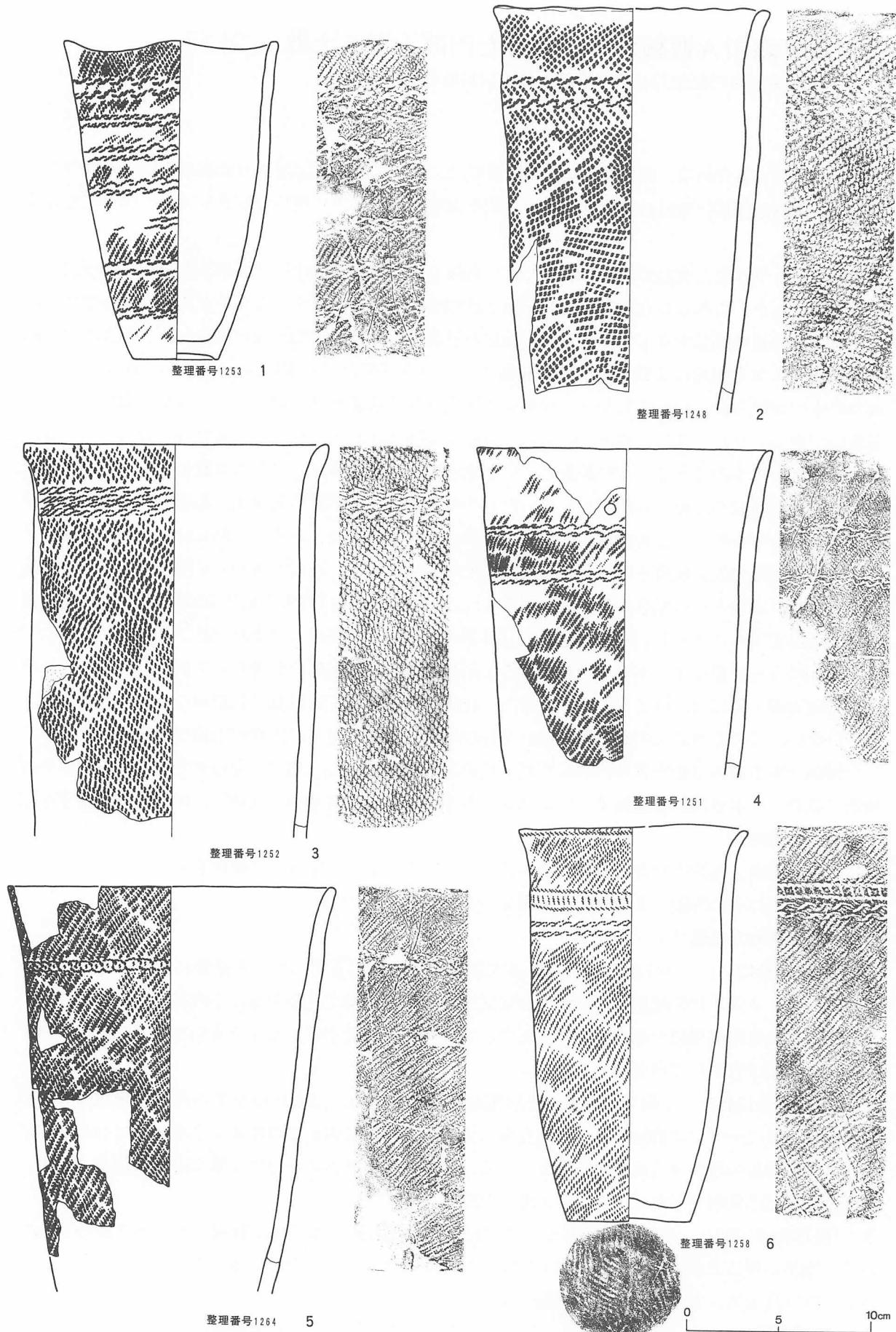
器形の復元された土器（1～17）

1. (整理番号1253) 4か所に頂部のある波状口縁のもの。器面にはL R原体による斜行縄文が施されている。2条1対の綾絡文（結節の回転文）が底部付近まで間隔をあけ7段施されている。最上段のものは口縁部文様帯を意識したと見られ、2段の縄（L R原体）によるものである。底部はあげ底気味。内面は磨かれて赤褐色を呈する。

2. (整理番号1248) 平縁ではあるが不明瞭な波状を呈する。口唇部分をあらかじめ無文とし、口縁部から体部にかけては複節の羽状縄文を施している。それに重ねて綾絡文を2条施している。体下半には複節の条の横走する縄文が施されている。口縁部から内面にかけて丁寧な磨きが観察される。内面の磨きは口縁部付近では横位、体部では縦位である。

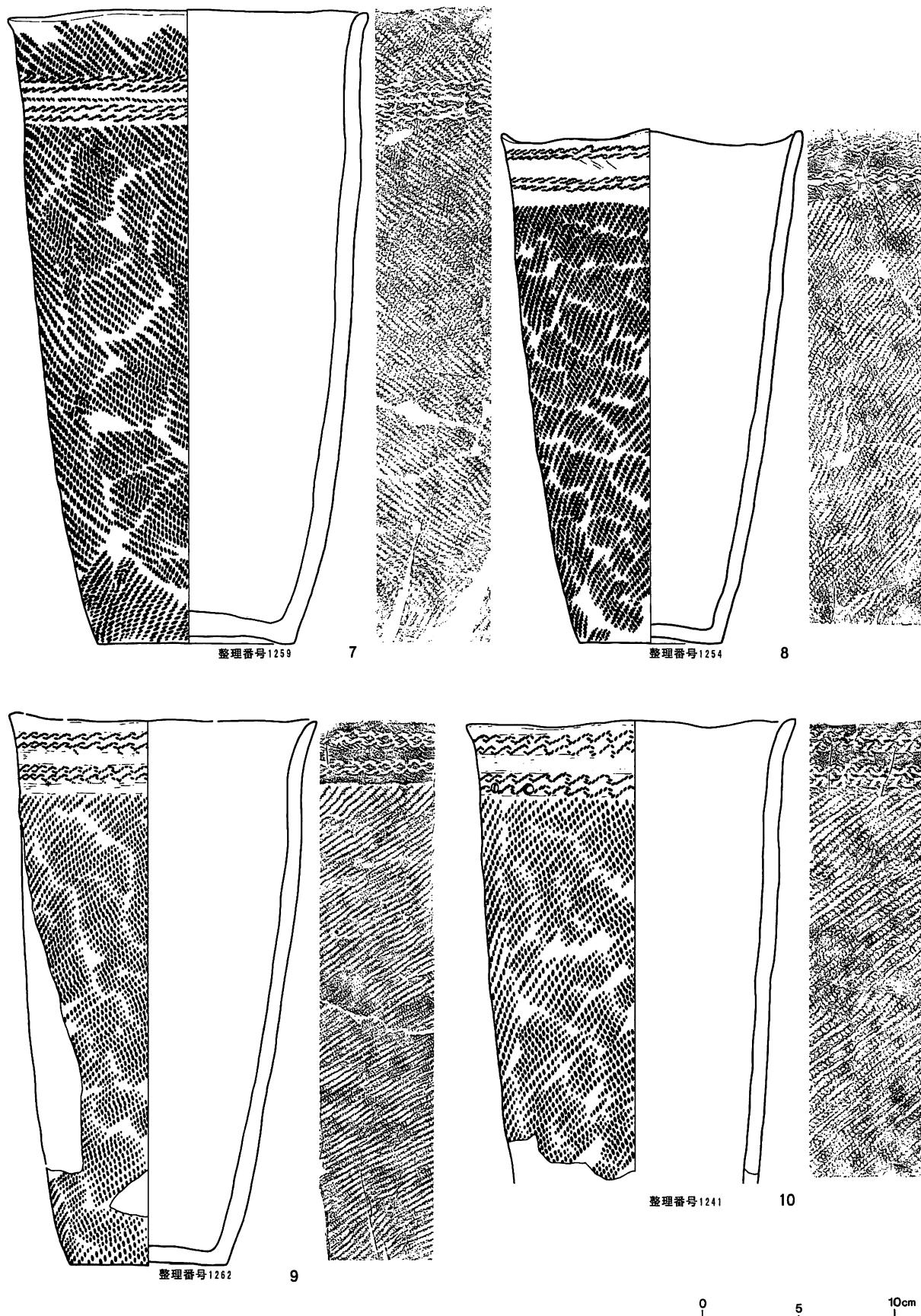
3. (整理番号1252) 平縁。口縁部から底部付近までR L R原体による複節の斜行縄文が施されている。頸部に綾絡文が4条。口唇部から内面にかけて磨きがかけられている。内面は風化が著しい。体上半部は黒褐色、下半部は赤褐色を呈する。

4. (整理番号1251) 平縁。口縁部の外反の度合いは比較的強い。L R原体による縄文施文後に、



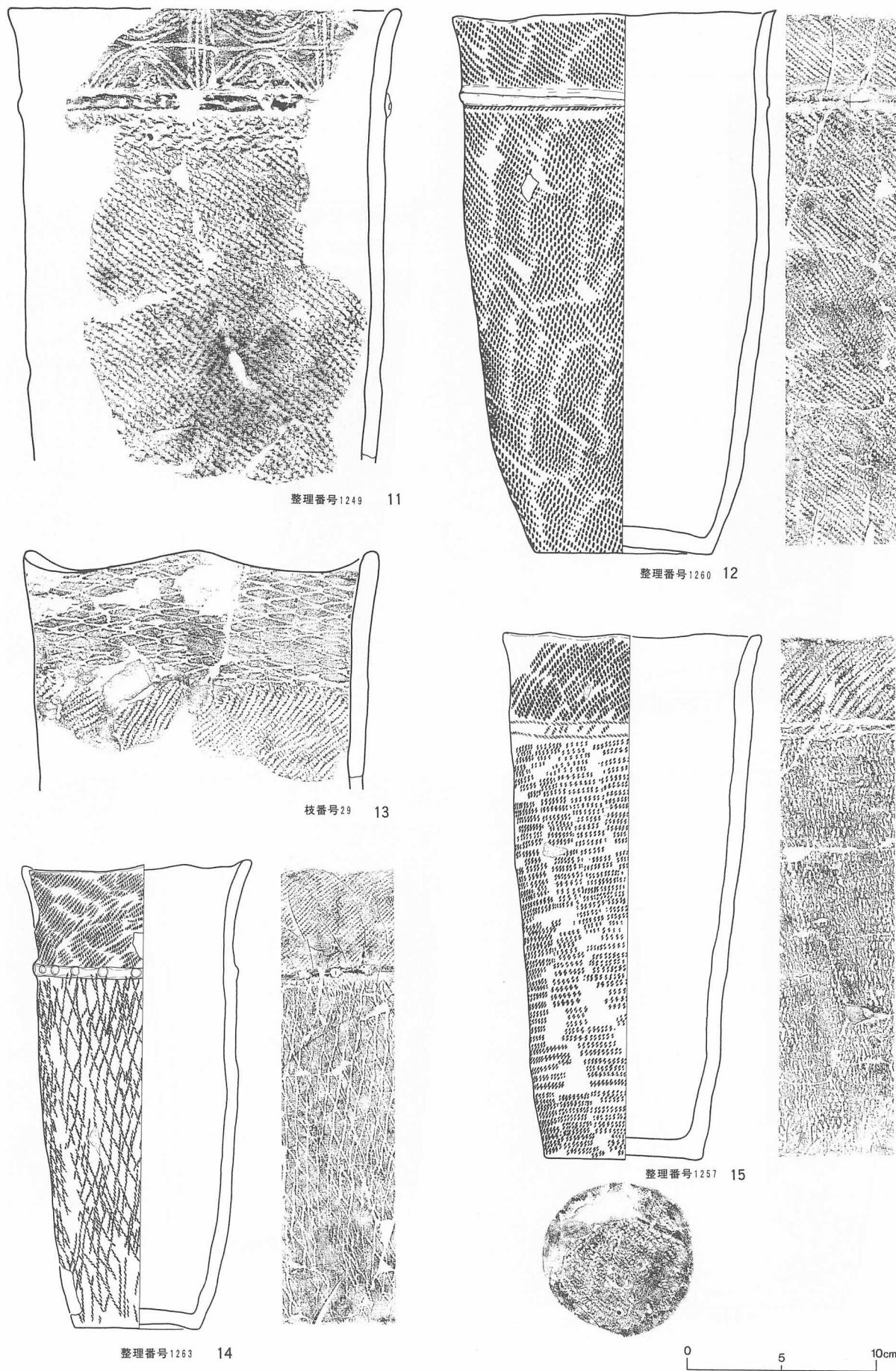
図VIII-7 森川A遺跡出土の土器（1）

2 森町森川A遺跡から出土した円筒下層式土器について



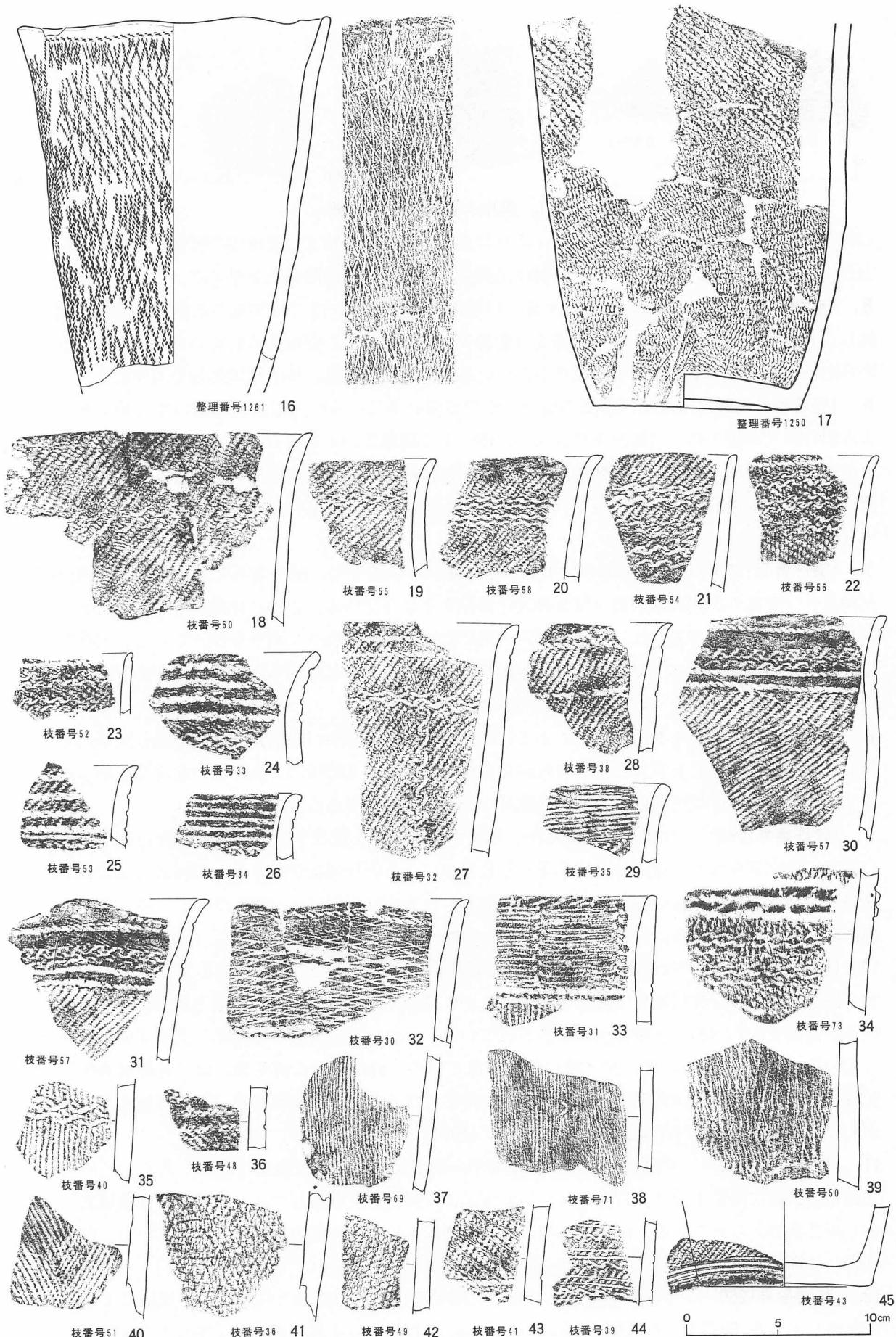
図VIII-8 森川A遺跡出土の土器（2）

VIII 成果と課題

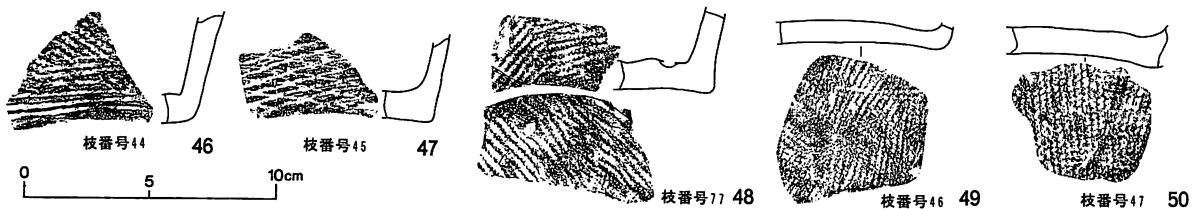


図VIII-9 森川A遺跡出土の土器（3）

2 森町森川A遺跡から出土した円筒下層式土器について



図VIII-10 森川A遺跡出土の土器（4）



図VIII-11 森川A遺跡出土の土器（5）

口縁と口唇部を磨いたものと見られる。これに重ねて頸部に綾絡文（R原体の結節）を施している。内面は丁寧にヘラ磨きされている。器面は黒褐色～褐色、内面は暗褐色を呈する。

5.（整理番号1264） ほぼ平縁を呈する。口縁部から体部にかけて付加条の原体による異条縄文を施し、頸部には2条1対の変形の綾絡文（変形の結節の回転文）が加えられている。施文後、口唇部から内面にかけてヘラ磨きが丁寧になされている。口縁部暗褐色、体下半は褐色を呈する。

6.（整理番号1258） 口縁部の外反の度合いがやや強い平縁のもの。器面にはあらかじめL R原体による斜行縄文が施され、口唇直下には同じ原体による縄線文が1条めぐっている。頸部を磨き無文帯を形成し、この部分に縄線文を2条施し、その間には縦位に短い縄の圧痕が付けられている。その下位には2条1対の綾絡文がめぐっている。底部にも縄文が施されている。熊野・八木（1974）の図3-5

7.（整理番号1259） ほぼ平縁を呈する。口縁部から底部まで0段多条のR L原体による斜行縄文が施され、底部の周囲のみが同一原体の縦位回転文となっている。頸部には縄線文が1条とその上下に2条1対の綾絡文が施され、口唇部から内面にかけては丁寧にヘラ磨きを加えている。口縁部内面付近は横位の磨きが、体部では縦位の磨きが観察できる。底面と底部外面にも磨きがあるが、底部付近は磨滅している。熊野・八木（1974）の図3-9

8.（整理番号1254） 4か所に頂部のある波状口縁。あらかじめ口縁部に無文部を残し文様帯とし、体部には0段多条のL R原体による斜行縄文を施している。文様帯に2条1対の綾絡文を施した後、縄文地と無文帯との境を磨いている。底部はややあげ底気味である。

9.（整理番号1262） ほぼ平縁であるが、わずかに不規則な波状を呈し外反の度合いがやや強い。口縁部に無文帯を残し、体部に0段多条のL R原体による斜行縄文が施され、口縁部には2条1対の綾絡文が2段加えられている。口唇部から内面および底面は丁寧にヘラ磨きされている。底部外面も縄文施文後磨かれている。熊野・八木（1974）の図3-7

10.（整理番号1241） ほぼ平縁を呈する。口縁部に無文帯を残し、体部にはL R原体による斜行縄文が施されている。文様帯に2条1対の綾絡文が2段加えられ、その後縄文地と無文帯の境を磨いている。口唇上から内面は丁寧にヘラ磨きされている。なお、この資料には図示した胴部に直接接合はしていないが、「底部」の破片が一緒に復元されている。資料目録の摘要欄には「底部別個体」との記載があるものである。観察の結果も同様で、非常に良く似ているが別個体である可能性が高いことから、「底部」を省いて図示した。熊野・八木（1974）の図3-8

11.（整理番号1249） 平縁とみられる口縁部から胴部までの大きな破片である。あらかじめ口縁部文様帯の区画に隆帯を設け、体部にR L R原体による斜行縄文を施した後、隆帯直下に綾絡文（R原体）が2条加えられている。隆帯上は細い棒状工具による斜めの刻み目が付けられている。口縁部文様帯には縄線文（R原体）により縦横の区画と弧状の文様が描かれている。

12.（整理番号1260） 平縁。あらかじめ頸部に隆帯を設け、口縁部と体部にR L原体による斜行縄文を施している。隆帯上はヘラ磨きがなされている。口唇部から体部にかけて丁寧に磨かれているが、

内面も底面まで磨かれている。器面には凹凸がある。熊野・八木（1974）の図3-6

13.（枝番号29） 4か所に頂部のある波状口縁のもの。体部にはLR原体による斜行縄文が施されている。口縁部の文様は単軸絡条体第6類の網目状撲糸文である。口唇部から内面にかけ丁寧に磨かれている。熊野・八木（1974）の図3-1

14.（整理番号1263） 4か所に不明瞭な頂部を持つと見られる波状口縁のもの。口縁部の外反の度合いはやや強い。頸部には低い隆帯が設けられて、体部には単軸絡条体第5類の網目状撲糸文が施されている。口縁文様帶は幅が広く、細いLR原体による斜行縄文が施されている。隆帯上には円形の刺突が不規則な間隔で加えられている。底部付近は施文後磨かれている。底部はやや上げ底気味である。熊野・八木（1974）の図3-2

15.（整理番号1257） ほぼ平縁であるがわずかに不明瞭な小波状口縁を呈する部分がある。体部には多軸絡条体（平織状撲糸文）の原体による撲糸文が施され、口縁部には付加条の原体による斜行縄文が施されている。頸部の文様帶の境にはLR原体による縄線文が2条施されている。口唇上から内面にかけては丁寧に磨かれている。体部、底部付近も同様に施文後磨いている。底面には多軸のものが施文されている。熊野・八木（1974）の図3-4

16.（整理番号1261） ほぼ平縁である。体部には単軸絡条体第5類の網目状撲糸文が施されている。口唇直下は狭い範囲を無文とし、LR原体による縄線が1条施文されているが、上下に回転させて斜行縄文になるところもある。口唇部から内面にかけては、口縁部付近では横位に、下半部では縦位に磨かれている。熊野・八木（1974）の図3-3

17.（整理番号1250） 上げ底気味の底部。底部付近にあらかじめ多軸絡条体の原体を回転施文後、体部にRLR原体による複節の縄文を施している。内面は口縁部から底面まで、底部外面も同様に磨かれている。器面は底部が赤褐色、体部は黒褐色である。

口縁部の破片（18～33）

18～31は体部に斜行縄文が施されているもの。22、24がRL原体ではかはLR原体による縄文である。18～23、25、27、28は口縁部の縄文に重ねて綾絡文、縄線文、沈線文を施すものである。これらは口縁部文様帶を構成する要素であり、また、文様帶の区画文となるものもある。18～21は2条1対となる綾絡文が施されている。20は口唇部をあらかじめ無文としている。21の上位の2段原体によるとみられる綾絡文は口縁部文様帶を意識したものであろう。22、23、27は綾絡文と縄線文が施されているもの。22、23は口唇直下に縄線文が1条めぐっている。27は口縁部に間隔をあけてLR原体の縄線が2条施文されている。頸部には綾絡文がめぐり、縦方向にも施文されている。25は口唇断面形は尖り気味で、太いLR原体の縄線文と沈線文が施されている。28の口唇断面形は尖り気味で、LR原体の縄線文が2条、間隔をあけて施されている。

24、26、29～31は口縁部の無文地に文様を施すもの。文様帶の区画には綾絡文、縄線文が施される。24は口縁部の外反の度合いの強いもので、LR原体の太い縄線文が4条、26にはL原体の縄線文が4条めぐっている。29は口縁部の狭い範囲に条痕文が施されている。30、31は同一個体の破片。波状口縁を呈すると見なされる。口縁部にあらかじめ無文部を残し、太いLR原体の縄線を口唇直下に1条、縄文帶との境に2条施文し、その間に綾絡文を施文している。

32は比較的幅の広い口縁部文様帶を持つもので、緩やかな波状口縁になるとみられる。文様帶の下位には隆帯があり、その上には刺突文あるいは刻み目が付けられている。口縁部には単軸絡条体第5類の網目状撲糸文が施され、口唇直下にLR原体の縄線文が1条めぐる。

33は体部には撲糸文が施されている。太い2条の縄線文で区画された口縁部には、変則的な網目状

撚糸文が施されている。原体は明らかにできないが単軸絡条体第6A類に類するものと見られる。

胴部の破片（34～44）

34、35、37～41は撚糸文の施されたもの。34は体部に多軸絡条体の回転文が施され、口縁部文様帶の下位にあたる位置に隆帯を設け、その上下に太い縄線文を施している。体部の文様に重ねて綾絡文が2段施されている。39は原体を二重施文することで網目状撚糸文となっている。41は多軸絡条体の回転文、42は複節のもの。43は付加条の原体による斜行縄文地にL R原体の縄線文と綾絡文が施されている。44は縄文地に1条ないしは2条1対となる沈線文が施され、その間に綾絡文が施文されている。

底部の破片（45～50）

45は底部に沈線文が、46には縄線文が施されている。47は単軸絡条体第5類の網目状撚糸文のもの。48～50は底面に施文されている。

おわりに

これらは一括資料であり、円筒下層c式に相当するものと考えられ、先に森川式として設定されたものである（大沼1986）。その特徴を簡単にまとめておくこととする。

器形等；底部から比較的まっすぐと立ち上がる丈の高い筒形で、胴部がわずかに膨らむものがある。平縁が多く、不明瞭な波状口縁、4か所に頂部を持つ波状口縁のものがある。口縁部が外反するものが多い。口唇の断面形は丸みを帯び、尖り気味となるものもある。内面は口唇部から底部まで磨かれ、ヘラ磨きのものがある。また、底部外面が施文後に磨かれる例が見られる。わずかに上げ底気味となるものがある。

文様；体部には縄文、撚糸文が施される。器形の分かるものでは、その7割近くが縄文である。単節の縄文が多く、複節、付加条のものがわずかにある。そのほとんどが斜行縄文である。ほかに羽状を構成する縄文、回転方向を変えて施文するもの、2種類の原体を複合施文するものがある。いわゆる撚糸文は非常に少ないが、網目状撚糸文、多軸絡条体の回転文のものが5、6個体ある。

口縁部文様帶は一般的に幅が広いが、少数ながら狭いものもある。①口縁部をあらかじめ無文帶として文様を施すもの、②体部と同じ縄文が施されるもの、③体部とは異なる原体の回転文を施すものがある。文様帶との境に隆帯を設けるものがあり、その部分に2、3の例では刺突、刻みが施される。文様は2条1対の綾絡文、1段あるいは2段の原体の縄線文で構成される。少数であるが沈線文が施される例がある。①では綾絡文のみを複数施す特徴がみられる。縄線文で鋸歯状、弧状の文様が描かれる。②では文様帶の区画と見られる位置に綾絡文が施される例が多い。また、条痕文の施されたものが1点ある。③では網目状撚糸文が多いことが注意される。

以上森川A遺跡の資料についてみてきたが、シラリカ2遺跡の資料（b-1類）とはいいくつかの点で若干の違いが見られる。b-1類については前節にその特徴がまとめられているので繰り返さないが、口縁部の外反の度合い、器形、体部の文様に縄文のものが非常少ないと、結束羽状縄文の施される資料の存在等にそれを見いだすことができる。口縁部文様帶の文様構成、要素の相違、地文の縄文、撚糸文の出現頻度の違いは地域的差として捉えることも可能であるが、時間差として把握する必要があるかと思われる。このように見ていくと森川A遺跡のものは下層c式のなかでも古い段階に、シラリカ2遺跡のものはc式の新しい段階のものと考えることができる。

なお、森川A遺跡の発見の契機、遺跡の位置、概要等についてはここで触れることができなかった。これらに関しては昭和49年の報告（熊野・八木1974）、資料目録（北海道開拓記念館1980）を参照していただきたい。

（遠藤香澄）